

日独慣用句の具象性と意味機能

伊 藤 眞

1. はじめに

慣用句研究の中で、対照言語学的視点から慣用句を分析する研究の重要性がたびたび指摘されているが、慣用句を対照言語学的に分析する場合、さまざまなアプローチのしかたが存在する。例えば慣用句の構成要素として用いられている語彙が、慣用句の中でどのような意味的機能を果たしているかを、それぞれの言語において比較・分析する方法がある。この方法で問題となるのは、それぞれの言語の慣用句の表す意味の中で、構成要素がどのような比喩の意味を担っているかということである。この方法は特に、慣用句のみならず、それぞれの言語の中で示されている比喩性について、普遍的または個別的な特徴を明らかにする際に有効な方法といえる¹⁾。他のひとつの方法は、慣用句の具象性 (Bildlichkeit) を出発点とする方法である。慣用句の具象性をひとことで定義すれば、「慣用句の中で、それぞれの構成要素の文字通りの意味によって表されている具体的な行為・現象」と言うことができよう。具象性は、慣用句全体の表す意味の根幹を形成している極めて重要な要素ということができる。例えば *die Katze im Sack kaufen* 「よく吟味せずに品物を買う」というドイツ語慣用句を考えてみよう。この慣用句の具象性は構成要素の文字通りの意味が示している「袋の中の猫を買う」という行為である。そしてこの具象性が「実際に確かめることなく袋に入ったままの猫を買う」と理解され、「よく吟味せずに品物を買ってしまう」という慣用句的な意味が生じていると考えることができる。なぜこの慣用句では、HundやHaseではなくKatzeが用いられているのかという理由についてはDuden Bd.11に、「かつて市場で、子豚やウサギの代わりに価値のない猫を袋に入れて、買い手を騙して売ろうとしたことに関係している」という解説がみられる²⁾。

ここ数年の慣用句対照研究で特に注目を集めているのは、慣用句の具象性に基づいて、異なる言語の慣用句に認められる普遍的特徴を明らかにしようという試みである。ところで慣用句の示す具象性というものは、慣用句の示す統語

構造と密接に関係しているということもできる。異なる言語の慣用句を比較対照する場合、慣用句の統語構造ではなく、慣用句の示す具象性に基づいて分析が行われる理由を考えてみよう。慣用句対照研究の目標は、それぞれの言語の慣用句に備わっている普遍性や個別性を明らかにすることであるが、言語体系の大きく異なる言語においては、当然のことながら慣用句にみられる統語構造にも大きな違いが認められる。しかしながら統語構造というのは、慣用句に現れている表層的な部分にすぎないのである。そして統語構造における相違点を探るだけでは、異なる言語の慣用句の表面的な部分での比較にとどまらざるを得ない。従ってそれぞれの慣用句に認められる普遍的な特徴を明らかにするためには、そもそも慣用句の統語構造の基礎となっているとも言える慣用句の具象性という深層にまで立ち入って比較対照する必要があると思われる。そしてこの具象性を比較することによって初めてそれぞれの言語の慣用句の普遍性を明らかにすることができるのである。ところで慣用句の具象性を扱う場合、最近、関心を呼んでいる認知意味論とも関連づけて論じられる場合も少なくない³⁾。慣用句というものは、そもそも「怒り」、「不安」、「恐怖」、「喜び」といった抽象的な感情が、具体的な事物や現象を用いて表現されているのである。このことから具象性の中には、それぞれの言語の話し手が、慣用句の構成要素として用いられている具体的な事物をどのようなイメージとして捉え、そのイメージから慣用句全体の表す意味がどのようにして導き出されているのかという、ある種の認知的側面が現れていると考えられるのである。即ち具象性に基づいて作り出されるイメージと、慣用句の表す意味との間に、それぞれの言語の話し手の認知作用が働いていると考えるのである。このような立場に立ち、慣用句の中で示されている具象性を source domain とし、その具象性を基礎として導き出されている慣用句全体の表す意味を target domain として、両者の間の関係を考察しようとする研究も発表されている。例えば Dobrovol'skij (1995b) は、Angst という意味機能 (target domain) を表すドイツ語慣用句について、(a) Kälte, (b) Unangenehme Empfindungen im analen Bereich, insbesondere Defäkation, (c) Körperliche Schwäche, (d) Feindliches Wesen という source domain を設定し、両 domain の間に何らかの規則性を探ろうとしている⁴⁾。そして target domain である Angst を更に、「突然生ずる不安」、「比較的長い時間継続する不安」、「個人的な不安」等に下位区分し、これらの下位区分した target domain と source domain との間により精密な関連性を明らかにしようとして試みているのである⁵⁾。このように考えると、慣用句はそれぞれの言語の

認知構造を考察する場合に、興味深い研究材料を提供していると言うこともできよう。

本論では、日独慣用句の具象性と慣用句の表す意味とのあいだに認められる関連性を中心に考察を進めることにしたい。

2. 慣用句の具象性

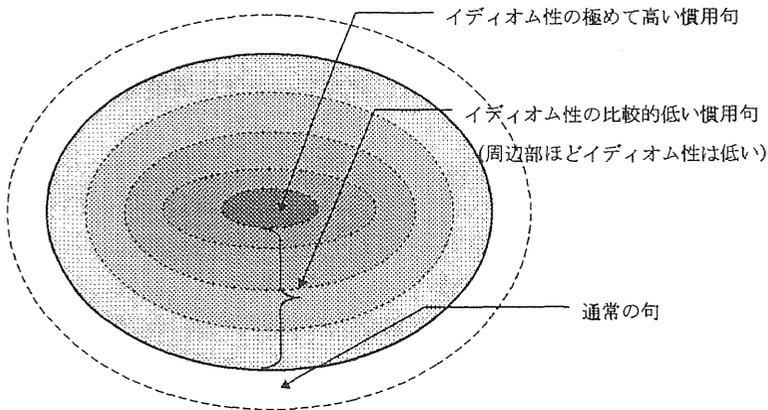
慣用句の具象性は、上述のように、慣用句としての意味を成り立たせている本質的な要素ということができが、この具象性とイディオム性 (Idiomatizität) との関係について考えてみよう。イディオム性とは、慣用句の構成要素と慣用句全体の表す意味との関連性を指す、いわば慣用句の意味的特徴であり、慣用句の極めて重要な特徴のひとつに数えられている。例えば以下の慣用句を考えてみよう。

jn. auf die Palme bringen
sich wie ein Elefant im Porzellanladen benehmen

jn. auf die Palme bringen という慣用句では、構成要素の表す意味「ある人を椰子の木のの上に上げる」から慣用句の表す意味「ある人を怒らせる」が形成されているのであるが、両者の間には何ら連想関係は認められない。即ちなぜ「ある人を椰子の木のの上に上げる」が「ある人を怒らせる」という意味になるのが不明なのである⁶⁾。従ってこの慣用句はイディオム性の高い慣用句とみなすことができる。この慣用句では構成要素の文字通りの意味「ある人を椰子の木のの上に上げる」が具象性となる。一方、sich wie ein Elefant im Porzellanladen benehmen という慣用句ではどうであろうか。この慣用句では「不器用でへまをして周囲に迷惑をかける」という慣用句的な意味を表しているが、この慣用句の意味は、慣用句の具象性「(壊れやすい) 陶器の店で (体の大きな) 象のような不器用な振る舞いかたをする」から比較的容易に連想することができる。従って先に挙げた慣用句よりイディオム性が低いということが出来る。

上述のように、イディオム性の高い慣用句では、具象性と慣用句全体の表す意味との間に、何ら関連性は認められない。従ってこれらの慣用句では、両者の間の関連性を探ることはほとんど不可能であり、具象性と慣用句全体の表す意味の関連性を探る場合には、考察対象から除外されることになる。ところで慣用句のイディオム性は、その程度もそれぞれの慣用句ごとに異なっており、

イディオム性を一様に扱うことはできない。また、イディオム性をいくつかの段階に分け、それぞれの慣用句がどの段階のイディオム性を示しているかを記述することも、そもそもイディオム性の段階を客観的に設定することがほとんど不可能であることから、極めて困難と言わざるを得ない。イディオム性を中心に慣用句を見た場合、慣用句とみなされる句の中核を構成しているのは、イディオム性の極めて高い、言い換えれば、慣用句の構成要素の文字通りの意味と慣用句の表す意味との間に何ら関連性の認められないものである。そしてそのような「典型的な慣用句」の周辺に、イディオム性の比較的低い、構成要素の意味と慣用句の意味との間にある種の関連性を認めることのできる慣用句が分布しているといえる。但し、イディオム性の高い慣用句とイディオム性の低いものとの間には、明確な境界線が存在しているのではなく、慣用句は高いイディオム性を示している典型的なものからイディオム性の比較的低いものへと放射状の分布をなしていると考えられるのである。(下図参照)



本論のように、慣用句の具象性と慣用句の表す意味との関連性を考察する場合には、イディオム性の高い典型的な慣用句ではなく、その周辺に分布している、イディオム性の比較的低いものが考察の中心に置かれることになる。ところで

jn./et. links liegenlassen

という慣用句を検討してみよう。この慣用句は、構成要素の文字通りの意味「...を左に置いたままにする」と慣用句の表す意味「...をわざと無視する」との間には、直接的な関連性は認められない。しかしながら、この慣用句の背景に存

在する言語外的な側面を知ることにより、両者の間の関連性が理解できるようになる。この慣用句は、「左側」というのは、人々が関わりたくない邪悪なもの、災いをもたらすものが置かれる側とみなされていたという民間信仰に由来しており、⁷⁾このことから「...を左側に置いたままにする」ことは「...を無視する」という意味を表すことになるのである。このように文化的・社会的背景を考察に含めることにより、具象性と慣用句の表す意味との関係が明らかになる場合も少なくないが、言語学的に慣用句を分析する場合には、文化的背景には立ち入らず、あくまでも言語学的な要因を中心に考察を行うべきであろう。従って、具象性と慣用句の表す意味との関係を探る場合には、両者の言語的な意味に焦点をしばって考察する必要があるだろう。

3. 日・独慣用句の具象性の比較

以下では日独慣用句の具象性を具体的に比較対照していくが、慣用句の意味分野として「怒り」を表すものを考察の中心として分析を行うことにする⁸⁾。

3. 1. 「怒り」を表すドイツ語慣用句

「怒り」を表すドイツ語慣用句として、本論では以下の慣用句を考察対象とする。

jm. auf den Fuß treten
 sich in den Arsch beißen
 jm. schwillt der Kamm
 ein schiefes Maul/einen schiefen Mund ziehen
 jm. platzt der Kragen
 mir läuft die Galle über
 jm. kommt die Galle hoch
 jm. kocht das Blut in den Adern
 jm. ist eine Laus über die Leber gelaufen
 mir reißt die Geduld
 aus der Haut fahren
 Gift und Galle spucken
 bei jm. ins Fettnäpfchen treten
 an die Decke gehen

in die Luft gehen
 die Wände hochgehen
 jn. auf den Baum bringen
 jn. auf die Palme bringen
 jn. in Harnisch bringen
 jn. in die Wolle bringen

上記の慣用句の中でjm. kocht das Blut in den Adernとjn. auf die Palme bringenを検討してみよう。両慣用句は例えば以下のようなテキストの中で用いられる。

<jm. kocht das Blut in den Adern>

Als er die verwüsteten Blumenbeete sah, kochte ihm das Blut in den Adern.

(Duden Bd. 11. S.118)

<jn. auf die Palme bringen>

Er brachte sie mit seinem Gerede langsam auf die Palme.

(Duden Bd. 11. S.534)

上記のテキストからも明らかなように、jm. kocht das Blut in den Adernは「怒っている」という状態を意味しており、一方jn. auf die Palme bringenは「...をかんかんに怒らせる」という、怒りの状態を引き起こすことを意味しているといえる。このことは、それぞれの慣用句の具象性を検討してみれば容易に理解できる。jm. kocht das Blut in den Adernでは「血管の中で血が沸き立っている」という「状態」を表す具象性を示しているのに対し、jn. auf die Palme bringenでは「...を椰子の木の上に連れていく」という「行為」を表す具象性が示されているのである。このように「怒り」を表すドイツ語慣用句は、まず「怒っている」という状態を表すものと、「怒らせる」という行為を表すものに大別することができる。

「怒っている」という状態を表す慣用句としては以下のものを挙げることができ、

jm. schwillt der Kamm
 mir läuft die Galle über

jm. ist eine Laus über die Leber gelaufen

usw.

一方、「怒らせる」という行為をあらわすものとしては、以下のものがある。

jm. auf den Fuß treten	aus der Haut fahren
jn. auf den Baum bringen	jn. auf die Palme bringen
jn. in Harnisch bringen	jn. in die Wolle bringen

usw.

を挙げることができる。ところで「怒らせる」という行為を表すものでも、jn. auf die Palme bringen jn. in Harnisch bringenは、それぞれ auf der Palme sein, in Harnisch seinのような形式で用いることも可能であり、この場合には、「怒っている」という状態を表すことになる。

3. 2. ドイツ語慣用句の具象性

次に「怒り」を表す慣用句の具象性を検討してみよう。ドイツ語慣用句 jm. auf den Fuß tretenは「...の足を踏む」という具象性を、また sich in die Arsch beißenは「自分の尻を噛む」という具象性を示しており、これらの慣用句の具象性は、「他人（自分）の身体に害を与える」と一般化することができる。一方、jm. schwillt der Kammと ein schiefes Maul/einen schiefen Mund ziehenは、前者については「鶏冠をふくらます」、また後者については「口の形をゆがめる」のように、「身体部位の形を変化させる」という具象性を認めることができる。ところで jm. platzt der Kragenについては、「...の襟がはじける」という具象性が示されている。「襟」というのは身体部位とはいえない。しかしながら「襟」というのは常に身体に接している部分であり、ほとんど身体の一部と見なすことも許されるであろう。そしてこの「襟」が「はじける」ことから、この慣用句についても「身体部位の形を変化させる」という具象性を認めることができるだろう。また mir läuft die Galle über, jm. kommt die Galle hoch, jm kocht das Blut in den Adernの具象性は、「身体内部における変化」が示されている。以上のようにして、「怒り」を表すドイツ語慣用句は以下のように一般化して分類することができる。

I. 他人（自分）の身体に害を及ぼす

jm. auf den Fuß treten, sich in den Arsch beißen

II. 身体部位の形を変化させる

ein schiefes Maul/einen schiefen Mund ziehen

jm. schwillt der Kamm, jm. platzt der Kragen

- Ⅲ. 身体の内側の状態が変化する
 mir läuft die Galle über, jm. kommt die Galle hoch
 jm. kocht das Blut in den Adern
- Ⅳ. 身体の中に異物をもっている
 jm. ist eine Laus über die Leber gelaufen
- Ⅴ. ある閉ざされた空間がはじける, 空間の中から飛び出る
 mir reißt die Geduld, aus der Haut fahren
- Ⅵ. 他人の嫌がることを行う
 Gift und Galle spucken
 bei jm. ins Fettnäpfchen treten
- Ⅶ. ある場所へ移動する
 an die Decke gehen, in die Luft gehen
 die Wände hochgehen
- Ⅷ. ある人がある場所へ連れていく
 jn. auf den Baum bringen, jn. auf die Palme bringen
 jn. in Harnisch bringen, jn. in die Wolle bringen

これらの具象性の中で、「Ⅴ. ある閉ざされた空間がはじける, 空間の中から飛び出る」については, mir reißt die Geduld の具象性では「今まで我慢をしていたが, 怒り・不満をしまっておいた入れ物(袋)が裂けて今までの不満が一気に吹き出る」ことが述べられており, また, aus der Haut fahren では「怒りのあまり自分自身を被っていた皮膚から飛び出し, 我を忘れる」という具象性を示していると考えられる。ところで「Ⅶ. ある場所へ移動する」と「Ⅷ. ある人がある場所へ連れていく」について考察してみよう。これら2つの具象性は, どちらも「ある場所への移動」が問題となっているが, その移動する場所をみると, an die Decke, in die Luft, auf den Baum, auf die Palme のように, 「高い所への移動」を示している場合が多い。この「高い所への移動」はⅦ, Ⅷの具象性を示す慣用句だけでなく, 他の具象性を示す慣用句にも認めることができるのである。例えば「Ⅲ. 身体の内側の状態が変化する」に含まれる mir läuft die Galle über では, 「胆汁があふれ出る」という具象的意味を示しており, また jm. kommt die Galle hoch の具象的意味は「胆汁が上ってくる」である。このように胆汁の量が増加し, 一定以上の高いところまで達した結果あふれたり, 胆汁が体の高い部分に移動したりすることにより, 「怒り」

が表されていると考えられる。またⅡ「身体部位の形を変化させる」に含まれる *jm. platzt der Kragen* についても、「襟がはじける」という具象性が示されているが、この具象性は、怒ることにより頭に血が上り、そのため首の血管が膨らみ、その結果として襟が狭くなったり、はじけそうになったりする気持ちが生ずることと関係しているという指摘もあり⁹⁾、「襟がはじける」という具象性とは直接的な関連性は認められないが、この具象性の背景を考えると「頭に血が上る」というように、やはり「高い所への移動」が問題になっているということができよう。

以上述べたことから、ドイツ語慣用句においては「怒り」という意味機能と「高い所への移動」という具象性の間に、ある種の関連性を認めることができるといえよう。

3. 3. 「怒り」を表す日本語慣用句

本論で考察の対象とした「怒り」を表す日本語慣用句は以下のものである。

目を三角にする	目に角を立てる
目くじらをたてる	目を剥く
目をつり上げる	青筋を立てる
頭から湯気を立てる	つむじを曲げる
怒髪冠を衝く	柳眉を逆立てる
肩を怒らせる	血相を変える
色をなす	腹が立つ
腹に据えかねる	腹の虫が治まらない
はらわたが煮えくり返る	頭にくる
鶏冠にくる	忌諱に触れる
逆鱗に触れる	堪忍袋の緒が切れる

これらの日本語慣用句についても、ドイツ語慣用句と同様に、「怒っている」という「状態」を表すものと、「怒る」という「行為」を表すものとに分けることができる。例えば「腹の虫が治まらない」、「はらわたが煮えくり返る」などは、どちらも「怒っている」という「状態」を表す慣用句ということができる。それに対し「目を三角にする」や「目に角を立てる」などは、「怒る」という「行為」を表しているといえよう。ところで日本語慣用句では、先に述べたドイツ語慣用句のように、「(他人を)怒らせる」という意味を表すものはな

く、その場合には、「目を三角にさせる」、「目くじらを立てさせる」、「青筋を立てさせる」のように、使役の形式にして用いられる場合が多い。

3. 4. 日本語慣用句の具象性

上記の「怒り」を表す日本語慣用句の具象性について検討してみよう。これらの日本語慣用句では、「目を三角にする」、「目に角を立てる」のように、身体部位の形を変化させて、即ち怒っているときの身体部位の様子を具象性として「怒り」を表している場合が多い。更に「はらわたが煮えくり返る」、「腹の虫が治まらない」のように、身体の内部の状態の変化を示すことにより、「怒り」を表すものもある。先に挙げた「怒り」を表す日本語慣用句の具象性としては、以下のものを設定することができる。

I. 身体部位の外見（の状態）を変化させる

目を三角にする	目に角を立てる
目くじらをたてる	目を剥く
目をつり上げる	青筋を立てる
頭から湯気を立てる	つむじを曲げる
怒髪冠を衝く	柳眉を逆立てる
肩を怒らせる	

II. 身体部位の内部の状態が変化する

腹が立つ	腹に据えかねる
腹の虫が治まらない	はらわたが煮えくり返る

III. ある場所に移動する

頭にくる	鶏冠にくる
------	-------

IV. 相手の嫌がる場所に触れる

忌諱に触れる	逆鱗に触れる
--------	--------

V. ある閉ざされた空間から飛び出る

堪忍袋の緒が切れる

「怒り」を表す日本語慣用句の具象性としては、上記の5つを設定することができるが、具象性のパターンについては、ドイツ語慣用句ほどの多様性は認められない。その原因として、「怒り」を表す日本語慣用句では、その具象性として「身体部位の外見（の状態）を変化させる」ものに集中していることも

関係していると思われる。

3. 5. 日・独慣用句の具象性の比較

以下では「怒り」を表す日・独慣用句の具象性を比較してみよう。「怒り」の具象性については、両言語とも「身体部位の形を変化させる」、「身体部位の内部の状態が変化する」ことなど、ほぼ類似したものが認められる。ところで日本語慣用句の「ある場所への移動」という具象性を表す「頭にくる」、「鶏冠にくる」では、移動する場所が「頭」や「鶏冠」など「身体の中でも高い部分への移動」が示されているといえる。このことからドイツ語慣用句の「ある場所への移動」という具象性を表すものと同様に、日本語慣用句においても「高い所への移動」と「怒り」との関連性が認められるといえることができる。また「ある閉ざされた空間から飛び出る」という具象性についても、「堪忍袋の緒か切れる」、「mir reißt die Geduld, aus der Haut fahren」のように、日独両言語の慣用句に共通する具象性といえることができる。このことから両言語の中に「怒りを閉じこめておく何らかの空間があり、その空間が破れれば怒りが生ずる」という認知的なイメージが存在していると考えられることもできよう。「身体部位の内部の状態の変化」を表すものについては、“jm. kocht das Blut in den Adern”と「はらわたが煮えくり返る」を比較すると、ドイツ語慣用句では「血が血管の中で沸き返る」、また日本語慣用句では「煮えくり返る」という具象性が「怒り」という慣用句の意味を導いている。「沸き返る」にしても「煮えくり返る」にしても、どちらも温度が一定以上になると生ずる現象であり、このことから「怒り」を「熱」との関連づけて述べるという特徴が、両言語において認められる。また「怒り」と「熱」との関連性は、「頭から湯気を立てる」という日本語慣用句においても認めることができる。

4. 結び

本論においては、日独両言語の中から「怒り」という意味分野に含まれるものを選び出し、それぞれの慣用句が示している具象性と、慣用句の表す意味との関連性を検討した。両言語の慣用句の具象性、及び具象性と慣用句の表す意味との間には、上で指摘したような共通性が認められる。このような共通する特徴は、両言語の慣用句を体系的に比較対照し、両言語の慣用句に存在している普遍的特徴を解明するひとつの手がかりになると言えよう。

注

- 1) 例えば伊藤 眞(1997)では、「血」とBlutを構成要素にもつ日・独慣用句について、この構成要素がそれぞれの言語の慣用句においてどのような比喩的意味を示しているかを検討した。
- 2) Duden Bd.11. S.376
- 3) Dobrovol'skij (1995, 1996) 参照。
- 4) Dobrovol'skij (1995b) S.328f.
- 5) Dobrovol'skij (1995b) S.336ff.
- 6) 両者の関連性について、人間は怒ると立ち上がったりのよう「上」と結びついてイメージされることと関係しているという指摘もある。Duden Bd.11 S.534参照。
- 7) Duden Bd.11. S.458 参照。
- 8) 「怒り」といっても非常に広い意味分野であり、その中には「ちょっと感情を害するもの」から「激怒」までさまざまなものが含まれている。「怒り」の段階を細かく下位区分することも可能であろうが、本論では細かい下位区分を行わず、これらを含めたものをひとつの意味分野として扱うことにする。
- 9) Duden Bd.11. S.413

参考文献

- Baranov, A.N./ Dobrovol'skij, D.(1996): Cognitive modeling of actual meaning in the field of phraseology. In: Journal of Pragmatics 25. North-Holland, Amsterdam (Elsevier) S.409-429.
- Dobrovol'skij, D./Piirainen, E.(1992): Zum Weltmodell einer niederdeutschen Mundart im Spiegel der Phraseologie. In: Niederdeutsches Wort, Beiträge zur niederdeutschen Philologie Bd.32 (Aschendorff), S.137-169.
- Dobrovol'skij, D.(1995_a): Kognitive Aspekte der Idiom-Semantik. Tübingen (Narr).
- Dobrovol'skij, D.(1995_b): Schiß und Espenlaub: Idiome der Angst. Folia Linguistica XXIX/3-4(Gruyter) S.317-346.
- Drosdowski, G./Scholze-Stubenrecht, W.(1992): Duden, Bd.11: Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Mannheim(Duden).
- Fleischer, W.(1982): Phraseologie der deutschen Gegenwartssprache. Leipzig (Bibliographisches Institut).
- Friederich, W.(1976): Moderne deutsche Idiomatik. Alphabetisches Wörterbuch mit Definition und Beispielen. München (Hueber).
- Görner, H.(1980): Redensarten. Leipzig (Bibliographisches Institut).
- Griesbach, H./Schulz, D.(1977): 1000 idiomatische Redensarten Deutsch. Berlin / München / Wien / Zürich (Langenscheidt).
- Griesbach, H./Uhrig, G.(1993): Mit anderen Worten, Deutsche Idiomatik Redensarten und Redeweisen. München(judicium).
- Herzog, A./Michel, A./Riedel, H.(1980): Deutsche idiomatische Wendungen für Ausländer. Leipzig (Enzyklopädie).

- Hessky, R.(1987): Phraseologie. Tübingen (Niemeyer).
- 井上宗雄 (1992) : 例解慣用句辞典 創拓社
- 伊藤 眞 (1991) : 慣用句とそのモデル化の試み ドイツ文学86号 157-166頁
日本独文学会
- 伊藤 眞 (1992a) : 慣用句の意味構造 言語文化論集35号 93-108頁 筑波大学 現代語・現代文化学系
- 伊藤 眞 (1992b) : 慣用句対照研究 一日独慣用句の対応関係—言語文化論集36号 155-169頁 筑波大学 現代語・現代文化学系
- 伊藤 眞 (1993) : 日・独慣用句の対照関係 — 人体の一部を表す名詞を中心に — ドイツ文学語学研究 橋本郁雄教授古稀記念論文集 97-109頁
- Itoh, M.(1995): Bemerkungen zum phraseologischen Wörterbuch für Ausländer. 言語文化論集40号 109-122頁 筑波大学 現代語・現代文化学系
- 伊藤 眞 (1996a) : 慣用句の具象性と比喩性
一日・独慣用句の類型論的研究の試み — 文法と言語理論 87-98頁
筑波大学 現代語・現代文化学系
- Itoh, M.(1996b): Phraseologieforschung — Bildliche Entsprechungen zwischen deutschen und japanischen Phraseologismen — ドイツ文学96号 57-65頁
日本独文学会
- 伊藤 眞 (1997) : 言語の具象性・比喩性・受動性 — 日独慣用句をめぐって — 比較言語研究とヴォイス 三修社 (印刷中)
- Korhonen, J.(1991): Kontrastive Verbidiomatik Deutsch—Finnisch. Ein Forschungsbericht. In: Sprichwörter und Redensarten im interkulturellen Vergleich, Opladen (Westdeutscher Vlg.) S. 37-65.
- Müller, K.(1994): Lexikon der Redensarten. München(Bertelsmann).
- 尾崎兼英 (1992) : 成語林 旺文社。
- Palm, Chr.(1995): Phraseologie. Eine Einführung. Tübingen (Narr).
- Röhrich, L.(1991-1992): Das große Lexikon der sprichwörtlichen Redensarten, 3 Bde. Freiburg (Herder).
- Sabban, A./Wirrer, J.(Hrsg.)(1991): Sprichwörter und Redensarten im interkulturellen Vergleich. Opladen (Westdeutscher Vlg.).
- Schemann, H.(1989): Synonymwörterbuch der deutschen Redensarten. Stralen (Straelener Manuskripte).
- Schemann, H.(1993): Deutsche Idiomatik. Die deutschen Redewendungen im Kontext. Stuttgart/Dresden(Klett)
- Schindler, W.(1993): Phraseologismen und Wortfeldtheorie. In: Studien zur Wortfeldtheorie. Tübingen(Niemeyer) S.87-106.
- Wotjak, B.(1992): Verbale Phraseolexeme in System und Text. Tübingen (Niemeyer).